

原 著

高齢者の過去の背景を活かした看護を通して得た実践的知識

小笠原 真理 (千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程)

谷 本 真理子 (千葉大学大学院)

正 木 治 恵 (千葉大学大学院)

本研究の目的は看護師が高齢者の個別性の尊重に向けて、日々の看護における過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識を構造的に明らかにすることである。

高齢者看護に熟練している一般病棟に勤務する看護師6名に対し実施したインタビューを質的統合法(KJ法)を用いて分析を行った。

その結果、看護師は高齢者の過去の背景を活かした看護から、【過去の職業や背景を把握することで今を生きる高齢者を理解しやすくなる】を基盤とし【過去の背景を理解する姿勢でいると互いに気持ちが共有できる】ことで、【過去の背景とのつながりを推測することで、高齢者に近づくことができ看護が変わる】ことがある。そして、【高齢者の過去の背景を共感し把握してケアに活かせることもあるけれど、それは誰もがみな共感できるわけではない】ことや、【過去の背景を知ることは看護師の姿勢に反映するが共有することで画一的な援助になるかもしれないのでそこが1番難しい】経験を積み重ね、【場の制限や理解することへの限界がある中で高齢者の価値観を尊び行うケアのすり合わせに、高齢者の過去の背景を活かす】といった実践現場の環境とのすり合わせを図りながら、高齢者が過去の背景から培ってきた価値観を尊重するための実践的知識を獲得していた。

以上より、一般病院において高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識には、個別的なケア実践についての意義と、その内容を他者と共有して行うケア実践への課題があることが示唆された。

KEY WORDS : elderly people, backgrounds, practical knowledge, daily nursing

I. はじめに

高齢者は長年培ってきた人生経験から、多様かつ個別的な背景を持っている。そのため、高齢者への看護では、高齢者が多様な過去の背景を持つ個人であることを認識し、高齢者がこれまで培ってきた個別性や価値観を尊重していくことが必要である。

高齢者の過去の背景に焦点をあてた取り組みは、回想法やライフストーリーの聴取という方法を通して展開されてきている^{1,2)}。しかし、筆者は高齢者看護に携わる看護師が、高齢者への日々の看護実践を通して自尊心を保ち出来る限り生き生きとした生活を維持できるよう支援する術として、知り得た過去の背景を活かした看護を提供している様子を目にしてきた。そして、このような高齢者の過去の背景を活かした看護にはその看護師のこれまで培ってきた看護実践経験の中から獲得してきた知識が反映されていると考えられた。加えて、このような

看護師の実践知は、病棟のチーム全体で検討・共有することはあまり行われていないと思われた。

老人看護に関する研究領域において、高齢者の過去の背景に着目した研究は、高齢者への回想法や生活史聞き取りに関するものは見られるものの、日々の看護実践の中で高齢者の過去の背景をケアに活かしている内容について言及している研究はほとんど見当たらない。原³⁾は高齢者の過去の時間に遡って得られた情報や理解は、一人一人の個別性を十分に活かしたケアプランの立案や焦点のあったケアの実践を可能にするとしながらも、人生の歴史として描写される高齢者の主観的な体験を汲み取るアプローチは、それぞれのケア提供者が経験的・試行的に関わっているのが現状である⁴⁾と述べている。このことから、高齢者看護に携わる看護師は、高齢者の過去の背景を理解する意義や有用性を認識しつつも、それらの認識を踏まえた看護の提供は日々の当たり前と思われる看護の中で経験的・試行的に展開されていると推察できる。

藤原⁵⁾は実践的知識と実践知との関係について、

実践経験に基づく専門的な見識は、価値観や信念から身体的感覚までを含む総体という意味で、実践知という包括的な概念でとらえるべきものであろうとし、実践的知識はそうした包括的な見識の総体のある側面を記述しようとする試みであると述べ、前者を実践の中から形成される見識の総体とし、後者を実践知の把握可能な部分と述べている。看護の場における実践的知識は看護師のそれまでの経験や、臨床の場で看護しながら学び積み上げられてきた直感的、身体的知識、また長年の実践の経験によって得た知識と定義され研究が進められている^{6,7)}。以上より、実践知は、実践の中から積み重ねられ熟知されてきた知識の総体と捉えることができ、実践的知識はそうした実践知の一側面を把握することに通じていくと考える。

そこで本研究は、高齢者の個別性を尊重するための看護に向けて、日々の看護を通して高齢者の過去の背景を活かした看護から獲得した実践的知識を構造的に明らかにする。これにより、個々の看護師の実践知を共有可能な知識として共有し、ケアに活かすことが可能になると考える。

II. 研究目的

看護師が高齢者の個別性の尊重に向けて、日々の看護における過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識を構造的に明らかにする。

III. 用語の定義

高齢者の過去の背景を活かした看護：対象者である看護師が、高齢者のこれまで歩んできた人生や出会った出来事、それに伴う価値観について理解し把握しながら、過去の高齢者の個人的・社会的活動の内容を看護に活かしていくこと

看護師の実践的知識：看護師のそれまでの経験や、看護実践経験から内省的に吟味していく中で獲得された知識

IV. 研究方法

1. 対象者の選定

対象者は、2施設的一般病院から研究対象者の基準を満たした高齢者看護に熟練している看護師6名であった。

Benner⁸⁾は看護師は一般的に初心者→新人→一人前→中堅→エキスパートの段階をたどると定義し、中堅者の評価として中堅者の実践は通常、約3～5年間、類似した患者集団を対象に働いているナースたちにみられる

と述べ、中堅者のナースは状況を全体的に知覚し、長期的目標に立って状況の意味を知覚できるため、状況を丸ごと理解できるレベルであると述べている⁹⁾。そのため、高齢者の過去の背景を看護に活かした経験を持ち、かつ柔軟に高齢者の過去の背景から患者の全体像を捉えることのできる看護師として、目安として5年以上の看護経験を持つ看護師、ならびに、高齢者の過去の背景を看護に活かした経験を言語化する能力を有する看護師を選定基準とし、この選定基準を満たす看護師を施設の看護責任者に推薦を依頼した。

2. データ収集施設

データ収集施設は、日々の看護の中で看護師の役割として高齢者看護に携わり、かつ日常生活の看護を主にしている施設として、高齢者看護に熟練している看護師が所属する一般病院をデータ収集施設とした。

また、高齢者看護に熟練している看護師が所属する一般病院は、老人看護の実践とその研究に精通した複数の老年看護学研究者へ推薦を依頼し施設を選定した。

データ収集を行ったA病院・B病院共に病床数は約250床であり、農業が基幹産業となっている首都圏の地域の中核病院であった。

3. データ収集期間

2009年5月～8月までの4ヶ月間

4. データ収集

データ収集方法はインタビューガイドを参考にして、対象者1人に対して約1時間、合計2回のインタビューを実施し、個別インタビューより得られた対象者の経験をデータとした。また、より効果的にインタビューを行うため、対象者が日常的に看護を提供している場での看護実践の様子を知るため、対象者1人に対して2日間の参加観察を行った。

インタビューでは参加観察に関する質問として、参加観察中に対象者が高齢者の何に着目し、高齢者一人一人の個性をどのように把握しようとしていたかなど、看護を行うにあたって考えた内容について確認し、質問をした。実践経験に関する質問としては、対象者が日々の看護の中で、高齢者の過去の背景を捉えて行った看護の経験について、その経験を振り返ってみて考えたこと・判断したことについて、「どうして、その関わりを行ってみようと思ったのだと思いますか」、「あなたにとって、その経験はどのようなものになりましたか」などと、対象者の持っている感情や思考についての認識を引き出すことができるよう、研究者は聞き手の立場をとり、対象者の語る看護場面をイメージしながらインタビューを行った。また、それまでの経験や看護実践経験から内省

的に吟味していく中で獲得された対象者の実践的知識をインタビューしていくために、語りの内容から看護実践を通して得られた対象者の考えを丁寧に確認し、より詳細に具体的な事例を聞くなどの工夫をした。加えて、2回目以降のインタビューでは1回目のインタビューの逐語録から、語られた対象者の実践的知識の内容を整理し、対象者がインタビューで語った内容とのズレがないかを確認し、追加や修正を行うための質問や、さらに深く掘り下げて聞きたい点について質問を行った。

V. 分析方法

高齢者の過去の背景を活かした看護には対象者である看護師自身の個人的な背景、援助を提供する高齢者との関係性など様々な様相があると考えられた。そのため、それらの内容を構造的に捉え、その意味や看護上の示唆を得るには質的統合法 (KJ法)¹⁰⁾が適していると考え、分析方法として選択した。

分析対象は、インタビュー時の逐語録を用いた。分析は、まず、各対象者の個別的な実践的知識を明らかにするために個人分析を行い、その結果に基づき全体分析を行った。具体的な分析手順は以下の通りである。

1. 個人分析の手順

1) ラベル作成

対象者の逐語録から、「看護師が高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識とはどのようなものか」をテーマに各1枚のラベルの中に一つの中心的主張が入るように表現し、ラベルを作成した。

2) グループ編成

ラベル全てから、文章全体の方向性が似ているものを集めてグループ編成し、集まったラベルのセット全体が訴える全体感をつかみ、表札として一文に要約した。表札をつけたラベルのセットは1つのグループとして束ね、残ったどこにも所属しないラベルと合わせて再び同様の作業を繰り返して行った。

3) ラベルの構造化

構造化の分析方法は、質的統合法 (KJ法) の手法を用い、最終ラベルになったところで、ラベル同士の関係性に着目し、高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識を図に示した。図の全体をみて、各最終ラベルのエッセンスをシンボルマークとして取り出した。

2. 全体分析の手順

個人分析結果より得られた各最終ラベルから取り出されたシンボルマークのすべてを用いて、個人分析の手順に則り構造化を行った

3. 信頼性・妥当性の確保

分析の過程において、老人看護とその研究に精通した大学院の指導教員によるスーパーバイズを受け、信頼性と妥当性を高めた。

VI. 倫理的配慮

個人を特定できる表現の不使用、対象者の権利の保護など配慮することを事前に約束した上で、書面にて研究への協力依頼を行った。なお、本研究は千葉大学看護学部倫理審査委員会の承認を受け、実施した。

V. 結果

1. 対象者の概要

対象者は20代から50代の女性 (A氏・B氏・C氏・D氏・E氏・F氏) 6名であり、対象者の看護師歴は6年から30年までであった。

2. 全体分析結果

1) 各シンボルマークについて

対象者6名の個人分析結果より得られた、各最終ラベルから取り出されたシンボルマークは合計37枚であった。これらのシンボルマークを基に全体分析を行い、6つの共通した性質をもつ実践的知識が抽出された。

以下、各シンボルマーク毎に具体的な内容を説明する。なお、【 】内はシンボルマーク、[]内は最終ラベル、「.....」は個人分析の最終ラベルである。

(1) 【過去の職業や背景を把握することで今を生きる高齢者を理解しやすくなる】

このシンボルマークの最終ラベルは「過去の背景から培ってきた価値観が今の高齢者の生活一つ一つに滲み出ていると、年々良く分かってきたから、全員ではないけれど過去の職業や背景を把握することが手掛かりとなって、今を生きる高齢者本人を理解しやすくなった」というものであった。

この内容には、高齢者の過去の背景を看護師が聞くことから高齢者への理解を深め、今を生きる高齢者の価値観に近づいたケアを提供していく足掛かりを得ていた内容が含まれていた。

ここの地域だと高齢となった今も、髪を梳かす習慣が残っている方や、肉体労働をやっていた人の手は荒れていたりする中で、とてもきれいな手をしている方は、過去の職業はサラリーマンだったのかなあとかその人の持つ生活パターンや身体の特徴から、過去の職業を捉えている

また、このような実践的知識は看護師としての経験を積

み重ねる中で深まっていた。

農家出身の高齢者は体力があるということに気づくようになったきっかけには、先輩看護師が援助をしている姿を見てああいう関わり方いいな、と思うようになったことがあるが、過去に農作業をしてきた高齢者は全ての科で共通して、感覚さえ掴んでしまえば離床を進めると上手いので、裏づけはないがやはり過去に農作業をしてきた高齢者は体力がある人が多いと年々良く分かってきた

高齢者と接している内に高齢者の行動にはその人の生きてきた歴史が関係して、そうせざるえない理由があるんじゃないかと考えるようになり、看護師の力の見せどころとして、高齢者の表面以外を捉えられるようにその人の話したい話を探って行く中で、特に今の70代後半の方は、激動の時代を生きてきて我慢強い人が多いので、他者に世話をされるということに屈辱感を覚える人がいると経験的に分かってきた

(2) 【過去の背景を理解する姿勢でいると互いに気持ち が共有できる】

このシンボルマークの最終ラベルは「少しでもケアに活かしていけるように、知っている知識を総動員して、過去の背景を理解する姿勢でいると、それは高齢者に限らずみんなに伝わって、気持ちを共有でき、共に喜びを分かち合えるようになる」であった。

この内容には、高齢者と看護師が共に思いを分かち合うことから得られた実践的知識の内容が含まれていた。もともと高齢者は苦手だったが、看護師という仕事を通して高齢者と関わってきた経験から、高齢者自身が出来る力を支援しようと思う気持ちが大きくなり、高齢者への支援に違いが生まれ、高齢者の過去の背景を知っていくことから、お互いが楽しく何らかの喜びを分かち合えるように関わろうと思うようになっていった

これまでの高齢者の過去の背景が今の高齢者の暮らしに影響を与えていると思うから、高齢者の過去の背景を少しでもケアに活かしていけるように、仕草や言動から知っている知識を総動員させて理解を深めようとするようになっていったけれど、外国籍の患者であっても、こっちが高齢者の過去の背景を理解しようという姿勢でいると、その姿勢が伝わるみたいなので、高齢者看護に限らずみんなそうなんだなって改めて思った

(3) 【過去の背景とのつながりを推測することで、高齢者に近づくことができ看護が変わる】

このシンボルマークの最終ラベルは「身体的特徴などから過去の背景とのつながりを推測していくと、高齢者に近づくことが出来て、その高齢者の個別性にあった支援ができる手ごたえがあり、高齢者への看護が変わってくる気がする」であった。

この内容には、高齢者の過去の背景を活かした看護を提供していく意義を看護師が自分なりに掴んでいる内容が含まれていた。

高齢者の過去の背景を知ることでその人の今の生活も見えてくるだろうと、これまでの経験から思っていて、高齢者の過去の背景をいかに引き出してけるかで高齢者への看護が変わってくる気がするから、過去の背景を捉えられれば、その人に合った個別のケアがやっていけるんじゃないかと思う

高齢者と地域の話をする時、話の弾み方から高齢者も嬉しいと思っていてくれるだろうと実感しており、高齢者との会話の手助けになるんだったらちゃんと地域のことを知っておきたいと考えて、周辺地域を回ってその中から共通の話が出来るようになっていったら、遠慮しがちな方も「申し訳ないけど」と言いつつ頼んでくれるようになってきたので、そういう所からも高齢者の生きてきた地域の話は高齢者との関係性を築く最初の潤滑剤になる手ごたえがあり、看護師が高齢者と話をする時に、地域のことを知っていることは大事だと思うようになった

加えて、この内容には看護師が高齢者の現在の身体的な特徴を観察することから、過去の背景を読み取っているものも含まれていた。

これまでの経験から、変形膝関節症や円背、股関節脱臼の方で、膝が痛いというのを訴える方は、過去に畑仕事か肉体労働をして、膝が減っているなど考えると、大体過去の背景として農作業をやっていた人が多い

(4) 【高齢者の過去の背景を共感し把握してケアに活かせることもあるけれど、それは誰もがみな共感できるわけではない】

このシンボルマークの最終ラベルは「高齢者の過去の背景を活かした関わりはその人の自尊感情や価値づけにつながるケアだから、高齢者の思いや過去の背景を共感し、受け入れることで把握して、ケアに活かせることもあるけれど、それは誰もがみな共感できるわけではない

い]であった。

この内容には、看護師自身の価値観と高齢者の過去の背景から培ってきた価値観を結びつけることで高齢者の価値観への理解を深めていく内容が含まれていた。

生活援助をしていく際に、看護師の価値観と高齢者が過去の生活背景から培ってきた価値観の違いはあるから、高齢者の個人的希望を看護に活かすには、特別にやり方を聞き出すのではなく日ごろの高齢者とのやりとりの中で、その高齢者はこれまでこんな風にやってきたんだな、というその人のやり様を蓄積し把握して活かしていく

過去に看護師をやってきた高齢者が仕事を辞めても以前と同じペースで間食していたら、糖尿が出たと話すのを聞き、同じ職業の立場からその思いは共感でき、自分の身になって考えると危機感をもたせるような声掛けができないと思った経験があり、高齢者に指導をしていく際は、初めて会う人にダメと言われるのは自分でも嫌だし、自分が嫌なことは患者にはしたくないからまず患者がやってきたことを一端受け入れてから指導をしていこうと考えるようになった

またその一方で、この内容には、高齢者の持つ価値観は看護師と共感しあうこともできるが、時としてそれが困難な場合もあることを、看護師はこれまでの経験の中から捉えている内容が含まれていた。

60年間梨畑を経営している男性が死んでもいいから、自分の梨畑を見たいと生き生きと話す思いに医療者みんなが共感して、「今この人にこれをしなかったら、後味が悪いんじゃないか」と何かQOLを高めるような働きかけができないかと思った経験があるけれど、結果として息子が意味がないと嫌がって梨畑を見せることはできず、家族が本人の思いを共感するのは大変なんだ、家族だからこそ分かり合えない部分があるんだということがわかった

(5)【過去の背景を知ることは看護師の姿勢に反映するが、共有することで画一的な援助になるかもしれないのでそこが1番難しい】

このシンボルマークの最終ラベルは「高齢者の過去の背景を知ることが看護師の姿勢にも反映して、援助効果が出ることもあるが、他の看護師と過去の背景を共有することで、画一的な援助になるかもしれないのでそこが1番難しい」であった。

この内容には、看護師が高齢者の過去の背景を知ることから、看護師自身の高齢者への受け止め方を肯定的に変化させていく内容が含まれていた。

これまで社会に貢献してきたと話す高齢患者の生き方が素晴らしいと感じ、自分の大切な話を伝えてくれたことが嬉しいと強く思ったし、その高齢者がこれまで生きてきた過去の背景を聞くことを支援できたことで、結果的に高齢者に対して敬意を持って接していくことにもつながり、その高齢者の人生の意味を考え今も価値ある自分であると思えるようなケアを意識的に手伝っていきたくと捉えるようになった

高齢者がこれまでの背景として1日に4回も入浴していたと知ったなら、その人が入浴するのは私達が考える清潔援助よりも、プラスの意味があるのかなと思うから、そんな高齢者の過去の背景から知り得たプラスの部分は、援助を提供する看護師の姿勢や気持ちにもつながって、高齢者への日常生活の援助を何らかの形で充足させたり、刺激できれば(援助の)効果がさらに出て、良い結果が出るのではないかと考えたりする

その一方で、この内容の中には、看護師が高齢者の過去の背景を知ることによって援助効果が出ることもあると理解しつつも、高齢者の多様な背景や価値観をスタッフ間で統一的に解釈していくことへの懸念を含んだ実践的知識を得ていたことが示された。

この地域は高齢だと何らかの形で農作業に携わっている方が多いので、GW明けぐらいは「そろそろ稲刈りの時期だな」と農家の生活を(この病院の)看護師はみんな推定していると思うし、もっと高齢者の過去の背景から知った情報を他の看護師とも共有して継続出来たら、患者の気持ちも違ってくるのかなと思うけれど、統一的な援助をするのも少し疑問もあり、たぶんそこが一番難しい所だと思う

(6)【場の制限や理解することへの限界がある中で高齢者の価値観を尊び行うケアのすり合わせに、高齢者の過去の背景を活かす】

このシンボルマークの最終ラベルは「病院の管理下で高齢者がこれまで培ってきた価値観と医療者から指導が必要なことは、すりあわないことが圧倒的だから、今までの暮らしぶりを想像して妥協点を探りながら、その人の守りたい生活のペースを守れるように看護に活かしている」であった。

この内容には、看護師が高齢者の築いてきた価値観、

生き方などに基づいて高齢者自身が状況に合わせて自ら、自分の行動を決定できるように促す内容が含まれていた。

認知症の看護には高齢者がやりたいことを取り上げないで、医療者の提供したいことも提供していく関係を築くことが大切だとわかったから、下着を見せて履かないとしても、それは失行から履き方がわからないだけか、その人の時代性から培ってきた価値観を考えなければいけないのか、という二本立ての知識や技術を看護師は持っていないと、高齢者を混乱させて今のやり方だけを押しつけてしまうから、高齢者が長年やってきたやり方でまづやってもらって、できないことを支援していくようになった

また、この内容の中には高齢者の価値観や思いを過去の背景から得た情報からできる限り想像し、高齢者の行動の意味にそって援助を行っていく内容も含まれていた。高齢者の過去の背景というのはそんなにわかることではないけど、私達も日常のさりげない所から試行錯誤する中で、認知症高齢者へ見当識をつけるために指の動きとか皺やシミを観察しながら、今は友達と話しているつもりなんだとか、友達はこの人は日焼けもして爪も厚いし農業を通しての友達だろうから、農業の話を振ってみようとか過去の背景を常に想像して看護に活かす試みをしているんだと思う

そして、この内容には看護師は医療の制約の中でも高齢者のこれまで培ってきた価値観を継続できることを目指して最善を尽くし、病院のペースと患者の価値観との妥協点を高齢者とすりあわせ、共に見出そうとしていた内容も含まれていた。

高齢者の長い過去を考えると病院で処置や食事の時間が決まっているが、それに合わせられない人がいると経験からわかっており、高齢者の昔からの生活習慣や価値観を捉えていくことが大事だと深く身にしみて実感しているから、その人の守りたい生活のペースを守れるように妥協点を探るような相談を医師ともしていくことが多々ある

2) 高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識

全体分析の結果、看護師は高齢者の過去の背景を活かした看護から、【過去の職業や背景を把握することで今を生きる高齢者を理解しやすくなる】を基盤とし【過去の背景を理解する姿勢でいると互いに気持ちが共有でき

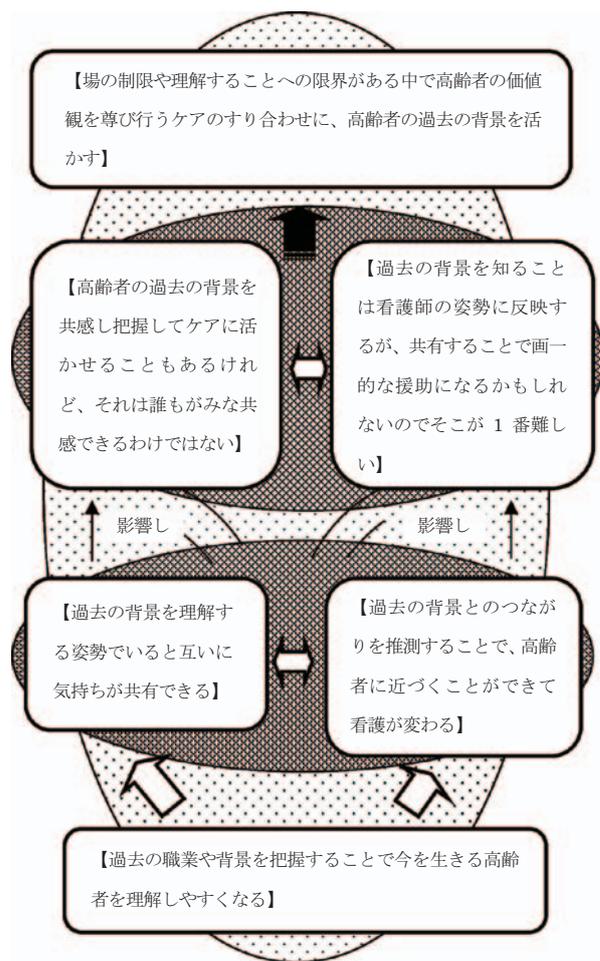


図1 看護師が高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識

る】ことで、【過去の背景とつながりを推測することで、高齢者に近づくことができ看護が変わる】ことがある。そして、【高齢者の過去の背景を共感し把握してケアに活かせることもあるけれど、それは誰もがみな共感できるわけではない】ことや、【過去の背景を知ることは看護師の姿勢に反映するが、共有することで画一的な援助になるかもしれないのでそこが1番難しい】経験を積み重ね、やがて【場の制限や理解することへの限界がある中で高齢者の価値観を尊び行うケアのすり合わせに、高齢者の過去の背景を活かす】といった高齢者が過去の背景から培ってきた価値観を尊重するケア技術の広がりをもたらす実践的知識を獲得していた。

VI. 考察

全体分析の結果から、看護師が高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識を構造的に明らかにした。以下、高齢者の過去の背景を活かした看護から

得ている実践的知識の特徴を考察し、実践的知識の共有に向けての示唆を記述していく。なお、考察中の【 】は全体分析で導き出されたシンボルマーク内の言葉と対応している。

1. 高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識の特徴

本研究の全体分析結果より、高齢者の過去の背景を活かした看護を実践する中で看護師は【過去の背景を理解する姿勢でいると互いに気持ちが共有できる】や【過去の背景とのつながりを推測することで、高齢者に近づくことができ看護が変わる】のように、高齢者の過去の背景を看護に活かす意義を掴んでいる内容を示す実践的知識と、【高齢者の過去の背景を共感し把握してケアに活かせることもあるけれど、それは誰もがみな共感できるわけではない】や【過去の背景を知るとは看護師の姿勢に反映するが、共有することで画一的な援助になるかもしれないのでそこが1番難しい】といった高齢者の過去の背景を看護に活かすことの難しさを示す実践的知識を掴んでいることが明らかとなった。これらの実践的知識は前者は看護師個人が高齢者個人へ看護を提供する状況において活用していた知識であり、後者は看護師が高齢者の過去の背景を他者と共有していく状況において、活用していた知識であった。そして後者の実践的知識には、過去の背景を共有することによって画一的な看護を提供していくことになるのではないかという危惧や、高齢者の過去の背景を誰もが共感することへの限界に触れる実践的知識が含まれていた。

Travelbeeは¹¹⁾ 病人を人間として知覚しそこなうこととは、病人についての看護師の持つステレオタイプや先入観念によるものであり、これらは他人の独自性を認識したり、反応することから看護師を妨げる心の構えであると述べている。この内容から、看護師が高齢者の過去の背景を基に解釈したことを、他の看護師と共有していく際、その背景に対する知覚がチーム全体でステレオタイプの単純化された見解になってしまえば、提供する看護は画一的な形でその高齢者を判断したものになってしまう可能性があることが推察できる。

これらより、高齢者の過去の背景は個々の看護師にとって援助を提供していく際、高齢者個人の理解を深めていける意義がある一方で、実施する援助内容を同じにするということではなく、その内容をチーム全体で共有していく時には、固定的な観念に基づいた展開にならないよう、工夫し配慮しながら進めていく必要があると考えられる。

2. 高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識の共有に向けての示唆

図1より看護師は高齢者の過去の背景を看護に活かす意義と難しさを示す実践的知識を掴んでいた。そして、これらを積み重ねて【場の制限や理解することへの限界がある中で高齢者の価値観を尊び行うケアのすり合わせに、高齢者の過去の背景を活かす】といった実践的知識を獲得していた。

菅原は¹²⁾、看護師の実践的知識の形成に影響を与える因子として、看護師の所属する場が外的要因として存在し、この要因が実践的知識と相互に関連しあい、看護師の対応力に影響を与えていたと述べている。本研究の結果からも、一般病院における看護師が高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識は、その高齢者の個性を尊重するための看護に向けて、実践現場の体制や環境とのすり合わせを図りながら展開する中で、獲得されていたと考えられる。

以上より、一般病院において高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識を、他の看護師やチーム全体でも共有していくには、看護師の所属する実践現場の体制や環境が、実践的知識に関連し影響を与えていることを意識しながら、実践していくことが重要と考える。そのためには、実践現場の体制や環境を的確に把握し、チームアプローチの視点を養っていくことも必要と考えられる。そして、このような視点を持って日々の看護を提供していくことは、高齢者の個性を尊重した看護をより実践しやすくするきっかけや、手掛かりへと発展し、看護の質向上につながっていくと考えられる。

3. 研究の限界と今後の課題

高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識の内容は、看護を提供する場の特色に応じて大きく異なってくると考えられる。それに伴い、高齢者看護に携わる看護師の役割や期待も多様化していると考えられる。そのため本研究結果は、全ての高齢者の過去の背景を活かした看護に適応できうる実践的知識ではないと考える。

今後は、高齢者へ看護を提供する各施設類型の機能や、特徴に応じた高齢者の過去の背景を活かした看護から得ている実践的知識の内容について、詳細に検討していくことが課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、貴重な学びを提供していただきました研究対象者の皆様に心からお礼を申し上げます

す。また、本研究にご協力くださいました関係スタッフの皆様へ深く感謝致します。

(本論文は、千葉大学大学院看護学研究科における修士論文を加筆・修正したものである。)

引用文献

- 1) 志村ゆず, 唐澤由美子, 田村正枝: 看護における回想法の発展をめざして: 文献展望, 長野県看護大学紀要, 5: 41-52, 2003.
- 2) 畑野相子, 筒井裕子: 認知症高齢者の自己効力感が高まる過程の分析とその支援, 人間看護学研究, 4: 47-61, 2006.
- 3) 原祥子: “いま, ここ” で生きる高齢者を理解する方法に関する一考察-ライフストーリーを読み解く視点から-, 日本看護研究会雑誌, 25(5): 83-92, 2004.
- 4) 原祥子: 老年看護実践におけるライフストーリー・アプローチの可能性, 老年看護学, 12(2): 23-27, 2008.
- 5) 藤原顕, 由井はるみ, 荻原伸他: 授業構成にかかわる教師の実践的知識-二つの授業実践の意味づけと関連づけに基づいた実践的知識の物語的構造-, 兵庫県立看護大学紀要, 7: 1-15, 2000.
- 6) 平野恵, 堀口朋美, 寺尾明子他: 肺癌末期の呼吸困難に対する塩酸モルヒネ使用に関する看護婦の判断と実践的知識, 日本看護学会論文成人看護II, 66-68, 1999.
- 7) 正木治恵, 湯浅美千代, 田川由香他: 老人ケアのエキスパートが保有する実践的知識, 日本看護科学会誌, 17(3): 240-241, 1997.
- 8) Benner, P.: ベナー看護ケアの臨床知 行動しつつ考えること, 医学書院, 22, 1999.
- 9) バトレシア・ベナー, エロイーズ・キャスカート, ジョイス・クリフォード他, 昭林社編: エキスパートナースになるためのキャリア開発, 昭林社, 11, 2006.
- 10) 山浦晴男: 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法 (I), 看護研究, 41(1): 11-32, 2008.
- 11) Joyce Travelbee, 長谷川浩訳: 人間対人間の看護, 医学書院, 160-161, 1988.
- 12) 菅原邦子: 末期癌患者の看護に携わる看護婦の実践的知識, 看護研究, 26(6): 2-18, 1993.

PRACTICAL KNOWLEDGE OBTAINED THROUGH NURSING UTILIZING THE BACKGROUNDS OF ELDERLY PEOPLE

Mari Ogasawara*, Mariko Tanimoto*², Harue Masaki*²

*: Master course, Graduate School of Nursing Chiba University

*²: Graduate School of Nursing Chiba University

KEY WORDS:

elderly people, backgrounds, practical knowledge, daily nursing

The present study aimed to structure the practical knowledge regarding respect towards the individual values and backgrounds of elderly people obtained by nurses through daily nursing.

Based on the content of interviews conducted with 6 nurses in a general hospital who were proficient in elderly nursing, the semantic connections and correlations among diverse types of practical knowledge were spatially situated and analyzed using the qualitative synthesis method KJ method, which enables structural analysis.

The factor “understanding past backgrounds makes it easier to understand elderly people as they are today” underlies the practical knowledge obtained by nurses through daily nursing utilizing the backgrounds of elderly people, and supports the factors “attempting to understand background enables mutual sharing of feelings” and “imagining the connection between the present and the past facilitates closeness with the elderly person and alters nursing”.

The observed practical knowledge structure consisting of “utilizing the values of elderly people during nursing while seeking common ground with the existing state of medical care” was affected by the factor “not all nurses are able to sympathize with and understand the backgrounds of elderly people and utilize this information during care” and “while understanding of patient background is reflected in the nurse’s attitude, it is possible that commonality between patients could result in uniform care, and this is difficult to avoid”.

As mentioned above, it has become clear that the significance of the individual care practices and the subject for the care practices that should be shared with other nurses do exist in the practical knowledges acquired from nursing which harnessed past backgrounds of elderly people in the general hospital.